
ありがとう

璃來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＊＊＊ ありがとう＊＊＊

〔ZΠ-γ〕

N
4
4
3
2
M

【作者名】

瓊來

バキイツ……………

「ヴォエツ………ゲホツ：ゲホゲホ……」

「調子乗つてつと次は生かしておかねえ……」

「璃來……行こうぜ。ポリさんい見られたらヤバいですし。（（笑

「おお……。」

警察になんて何回捕まつてるか知らねえけど
パクられるのはいい加減嫌だしね。

今ボコッた奴等はチクらねえと思つけど……。

「璃來………。」

祥弥の顔が引き吊つている。

そして、祥弥が指を差していく方向を見ると、
鞄を抱えた女が立つて居た。
立つて見ている。

ココは街外れにある廃墟地。
しかも立ち入り禁止区域だ。
この状況からすると、
俺らに付いて来て、
始めから今まで見ていたに違いない。

「 アイツ絶対見てたっしょ…。どうすんの？」

祥弥の顔は引き吊り度がましている。
どうする? って聞かれても…。

「…………わ わかんねえ…………。」

須藤璃來 (16) T高校 1年F組18番

西條祥弥 (16) T高校 1年F組17番

夏休み目前の7月…

俺らは人生最大の盲点にぶち当たつた。

「 … オイ … そこの女。俺ん家来い … 。」

「え…。」

「 てゆうか普通に面倒くさいんだけど … 。」

20分位無言で歩いて俺の家に向かった。
誰も一言も話をしようとしたしなかった。

「 祥弥…。その女俺の部屋まで連れてつてやつて。」

「 おつけ……。」

俺はリビングにケータイの充電器を取りに行き、
2階にある俺の部屋に入ると、
正面に祥弥が座っていて、

女は俺らに見つかった時の格好のまま
部屋の隅にたつていた。

「そこ座れば？？」

俺と祥弥が座つている反対側を指差した。

「あつ……あのあいがとうござります……。」

確實にビビつてゐるよなあ……。

女は鞄を抱えたまま俯いていた。

「あの……殺さないで下さ……。」

少し驚いて祥弥と顔を見合せた。

「あつ……イヤ、殺しはしねえけどわあ……。（汗）

祥弥は若干引き気味だった。

「率直に聞くけどお前誰……？」

俺は少し顔を覗き込ながら聞いた。

「…………つかコイツT高だら……」の制服……。

「えつあの、T高校1年F組1-2番の木城 優莉花「きしうりか」
15歳です。一応同じクラスなんですけど知らないですよね……。」

「同じクラス――――――?! 12番つて俺の斜め後ろで璃來の隣だろ

？？！（驚）

「まじかよ…。尙更めんどい気がすんだけど…。」

「つか何で俺らの喧嘩見てたの？？」

「何でかは…その…いつ、言えないです…（汗）

「何で言えない訳？？何？？疾しい事でも有る訳？？？」

「あの…そ…その…あの…え…と…。」

女は答えられないまま泣いてしまった。

顔は見えないけど、

相当純粋な女なんだな…と思つた。

「祥弥…お願いだから泣かせんなりば…。」

「わあ…。泣かせるつもりは無かつたんだけどさあ…つい。」

「はあ…まあ、理由はともかく、

今回の事については誰にも言わないでくんねえ？

俺らも色々事情が有るんだわ？？？」

女の隣に行つて特別大サービスで
頭をよしよし（笑）をしてやつた。

女は落ち着いたのか、

顔を上げてこっちを見た為にバツチリ田が合つた。

「ヤバッ…！超ヤバッツッ…！…もづくチ見んなツッ

ツ？？（爆）

やべーやべーやべーやべーやべーやべーやべーやべー
本氣でやべー……

「つ……璃來……ひひひひひひひひひひひひひひ

「やばい……。

「ひひした？？想像を絶するブスだつたか？？（（笑）

「わよべーよ。想像を絶するの可憐や……。

「ちびーーよ。想像を絶する可愛や。」

祥弥の居る位置から女の顔は見えない。

「はあ～？？田が腐つたかあ～？？んなわけねえ…ヤツバ…！…えツ？…ちよつと待とう？？！普通に可愛いよねえ～？？！…しかもまさかのスッピン？？！」

「だからヤバいっつただろ馬鹿が。誰の田が腐つたって～？？」

「イヤあ～誰だろ～～～？？？（汗）

「ふふつ…～～～」

女の笑い声い俺等は反応して、同時に女を見た。

「面白～…。あつ…その…」めんなせ～つ。」

「イヤイヤイヤツーーー何でそー謝んのツ…」

この女、天然つてよりも馬鹿つてのが勝つてんな。
しかも謝り上戸だし…。（汗）

「ねえ～、彼氏とか居るのー？」

祥弥：何やつてんだよ（汗
お前彼女居るだろ。
さすがにキープするには勿体ねえし、
何か可哀想だろ…。

「彼氏…？！そつ……そんな素敵な存在つ…私には贅沢過ぎます…
…。」

「一回は居た事あんだろ？？好きな男とか…。」

「一回も在りません…。好きな男性は…。
入学式の時が初恋ですかね…／／／」

「嘘でしょ～？！入学式って何時の？？
幼稚園？小学校？」

「いえ。高校の入学式です。」

「へえ～～～。つてええええ～？？？」

高校の入学式で初恋つて…。
本気で言つてんのかよ…。
15年間何してたの…？？？

「あの……須藤君……可笑しいですか？」

急に俺に話振つてくんなんよ…。（汗
祥弥と話してんなら祥弥に聞けつつの…

「可笑し…………… つつくはねえ？？？」

まあ俺も本気で好きになつた女とかいねえし

「そりやうなんですか。」

西條君は……どうなんですか？？

「俺？？俺は中2の時からD組の裕里菜って知ってる？？」

「青木裕里菜さんですか？？」

あの人4月は廊下ですれ違って

まさか西條君の彼女さんだつたんですか！！

「留つてゐる?!!」あーつああ見えて俺の前だと超一イヤシ一イヤシなの!!

!

「ヤンニヤン……甘えん坊つて事ですか??

今、どうやって答えに辿り着いたのか
頭ん中見てみてえ。）（笑

「そ、そ、そ、つ、ー、ー、よ、く、分、つ、た、な、！、！、別、人、の、様、に、違、う、か、ら、つ、ー、ー、（、（、笑、」
つか何で話がぶつ飛んで恋話になつてんの？？
呼び出した意味合い無いんだけど…。

* * * あつがとう* * *

NO・2 (後書き)

書くのが疲れてしまったので凄い短編です… ((ORZ

でも次話ありますので楽しみにしていて下さい…。

璃來

「 Bieber でもいいナビわー、門限的な平氣なわけ？？」

「ああ…ウチ基本的には放任なんです。だから私が何時に帰ってきて
ても干渉して来ないんです。」

「ふう～ん。で？？ Bieber すんの？」

「…………分からないです。あつ、でもこのままソファに居座るのも迷
惑だと思つて帰らして頂きます。」

使い慣れた敬語だなあ。

その敬語に似合わないのは
唯一の容姿だ。

人並みより少し短いスカートに
第2ボタンまで開けて、
腰には茶色のカーディガンを巻いて、
かなり明るい色の茶髪。

敬語とか似合つてない見た目。

中身は結構似合つてる氣がするけど…。
まあ簡単に言えば、

GAL が敬語使つてるパターン。
しかも GAL のクセにどもる率高過ぎ。

「帰るの？？つーか家何処にあるの？？俺デカイコソビニの田の前

「家は須藤くんの家の12軒先の所です。」

「近つ……中学何処??!!」

「丁南中学校です。」

「そんなんに近いならウチで飯喰つていいくかあ??ビツセ帰る時間
気になくて平氣なんだろ??!!」

「うせ送る羽田になるなら飯を喰つた後の方が俺にとけちやあ都合
が良くもある。」

「やつだなッ!!俺も今日璃來の家で飯喰う約束してんの。コイツ
ん家一人増えた位で怯まねえし（笑）」

「それは一里ある。（笑い）

「それひどいひつ意味ですか??!!」

「コンコン……キイ…

「璃來兄ちやー!」あさりよー。リコングちりつヒマガ三三
たお。」

「パタン…

「あれ妹。璃奈つづーの。
今はまだ2歳。」

「か…可愛いですツ…！」

「リビングの事をリリングって間違える所が可愛い」

「ははっ…どうでもいいけど下に行こうぜ。今日はカレーだな。」

「ツしゃあ～～！～～（笑」

大袈裟に喜ぶ祥弥に爆笑しながら3人で階段を降りてリビングに入った。

「母ちゃんただいま。
わりいー1人増えた。」

「おかえり。1人位平気だけどさあ、帰つて来てリビングに入った
んだつたらただいま位言つてから引っ込めよ。さつさと座っちゃい
な。」

「おう。」

「由里江さんおじやましま～す。」

「祥弥じやん。いらっしゃい。」

「あの…お母さんお邪魔します。初めまして、木城優梨花と申し

ます。今日は急にお食事を御一緒にさせて頂いて申し訳ござりません。

「

「あらら芝……礼儀正しい女の子だね……見ての通り大人数だから一人位何ともないよ! 璃來の隣が空いているからそこに座りなさいね。」

「はいッ!!!!」

「璃來!!!! お前彼女出来たのかよ?」

璃勇 (17) 高2。

「出来てねえよ。田撃女。」

「イヤイヤ……意味わからんねえから!」

兄貴も目があつたら殺されそうな位イカツい男だ。おれに取っちゃ意氣がるチワワ位怖くないんだけど……。

「璃來おかれりー。祥弥と…誰ちゃん?/?」

「木城優梨花です。」

「優梨花ちゃんね。私璃華だよ。19歳で大学1年生やつてんの(笑)

「よろしくお願いします。(お辞儀)

「可～愛～い～」（笑）

「おい！え ッと…き …木城優梨花！ココ座れ。」

「あつはい！」

パタパタ走つてくる女は、俺の隣にちょこんと座つた。
こんだけ人数が多いと椅子を使う訳にもいかず、食事ば座卓だ。
女は予想通り礼儀正しく正座していた。

「木城、取り敢えず名前教えておくわ。

木城の隣から璃奈（2）、璃音（1）、璃優（5）、

璃麻（7）、璃勇（17）、璃華（19）、璃羽（14）、

璃亜（15）、璃希（12）、おれの10人兄弟。

母ちゃんが42歳で親父が43歳。12人家族。多いだろ（笑）

「多いですね。でも覚えましたよ。

璃奈ちゃん、璃音くん、璃優ちゃん、璃勇さん、

璃華さん、璃羽ちゃん、璃亜ちゃん、璃希くん、

璃来く…じゃなくて須藤くん。ですよね。」

「すげーすげー！全部覚えてんじゃんーヤベーなお前ッ…！」

「うわーこひまーじーこー おねこひま こーじーじーじーじーのー

」

璃奈は、きっと俺が木城の頭をわしゃわしゃつたから
木城に良い子悪い子すると言つたのだろう。

須藤家では、頭をわしゃわしゃするのは、

「良べできました」の証だ。

俺も小さい時からそうだったから、

弟や妹を讃めるときはいつもそいつある。

「おねいちゃん、璃來兄ちゃんはね、須藤じゃなくて璃來つてやんだよ～。だからね、璃來つて呼ぶんだよ～。」

用事特有の話し方で話している璃優は人見知りしない方で、凄く楽しそうに話していた。

「璃優残念ながら、俺須藤つていうんだよねえ。知つてた？？璃優も須藤つていうんだよ。」

「う～ん…知つてた！…！」

えへへと笑う璃優は本当に可愛いくと思つ。俺に好きな物は？と聞くと、家族、金、喧嘩、友達で返つてくる。（笑）

「ママあ～…じゅー今日璃來兄ちゃんのお膝で『飯食べるー…！』

「いいよ～。璃來の制服汚しちゃダメだからね。」

「わかつたあー！…！」

スプーンとキティーちゃんのコップを持つてきて俺の膝の上に滑り込んで来た。

「軽い軽い！お前もつと食べろよー。」（笑）

「璃來～優梨花ちゃんこまわしてやってくれる？？」

祥弥からカレーがまわってきて、
目の前にカレーが並んで、
「いたらきまちゅ」という
璃奈の声で皿が手を合わせて
「いただきます」を
言つてから食事が始まった。

「何かいいひの良いですね。」

「わづか？？夏から冬まで暑苦しいぞ。」

「私4人家族で21の姉が居るんですけど、ちょっと事情があつて高校を卒業と同時に家を出て行つてしまつたつきり音信不通なんです。母と父とも時間が会わなくて食事はいつも1人なんです。だから大人数で食事をするのは何年前の話つて感じで…。」

結構シビアな道歩いてんだな。

放任されてるのも

実は嬉しくないんじや
ねえのかな。

俺は放任つてのも

良いなとは思うんだけど。

つて感じでちょっと

心配もしてみたんだけど…、

「まあ気が楽だから良いんですけどね。」

と心配ない様な返事をしてきた。

自分で言つのも何だけど、

男とはとても単純な生き物である。

女はもっと複雑なんだろうけど、
男は単純な思考回路と
複雑な思考回路の2つを持つ。

そして、木城の話を聞いて
少し複雑な思考回路に繋がった。
だけど、今の一言で、
単純な思考回路に繋がった。

「ふ ん。なら良いんじゃね？」

「オーケイオーケイ。何2人でお話してんすかあ～??」

「あ、??まあ色々だ色々。」

「んにそれッ！…超寂しいわ…！」

賑かな食事も終わり、祥弥はバイトで先に帰ると書いて徒歩2分も
しない所を自転車で帰り、木城が帰ると言って、俺が「気を付ける
よ」と言つと、姉貴に「送つてやれよ」と頭を蹴飛ばされた。

「オイ…送るから。家どっち??」

「玄関を出て左です。でも12軒先の距離だけですよ??」

「つべ」。」 てんじゅねえよー送るからー。一早く行くぞー。」

「あー。」

家を出た瞬間に沈黙の闇に包まれた。
その沈黙を破ったのは木城だった。

「須藤くんの家がこんなに近いと思つませんでした。」

「俺も思つてなかつた。」

そしてまた沈黙に戻つた。

「何で俺らの喧嘩見てたのか知りたいんだけど。」

「それは言えないです。」

「よねえ。」

「すいません。」

「謝んなくて良いよ。まあいつも深く問い合わせたりしない様にす
るし。」

「はー。」

この道結構暗いし、
意外と相当な距離がある。
1人で帰らせてたら
変な奴に絡まれてた
かもしだねえな。

「送つ」といて良かつたな。」

「えッ…？」

「ああ、こっちの話。」

10分程歩いたとき、
俺は木城の足取りが重く、
歩く速度も遅くなつて
いくのに気付いた。

何故気付いたのかといふと、
俺は歩くのが早い方だからだ。

7、8分前迄は隣を歩いて
居たのにドンドン後ろの方に
下がつて行くのが横目に入つて、
後ろを振り返つた。

「どうした?? 飯の食い過ぎか??」

「いえ……平氣です……。」

ドンドン後ろに下がっていく。
ドンドン顔が下を向いていく。

「あ、家口口です。」

全体的に白で、当たり前だが
俺の家よりは小さい。

初めて見たハズなのに、
何処か懐かしみのある家だ。

「お前本氣で平氣か？顔が青白いぞ？」

「私の部屋が2階に有るんですけど、
部屋の前まで付いて来て貰つても
良いですか？」

「あ、ああ……まあ良いけど。」

木城は家の鍵を開けると、
少し速歩きして階段を昇つて行く。

俺も仕方なく木城の後に付いて行つた。

階段を昇ると、

廊下の右奥の部屋の前に立ち、
「ありがとうございます」と言つて
部屋の中に入つていった。

俺は何か微妙だな、と思いながら
階段を降りていった。

階段を降りてゐる途中に
皿の様な食器が割れる音がした。
木城の親がコップでも
落としたのかとも思つた。
だけどその後に怒鳴り声が聞こえた。

「あなた本当に馬鹿なんぢやないの？…」

「お前に言われたくないな！…第一子供の気持ちも分かつてやれないのか！」こんだから優梨奈が家を出て行くんだ！…」

「何なのよ…！あなたは仕事やつてねば良いけどちばは子供の面
倒と家事もやつて地区の仕事もやらなくつちやけないのよ…！…あなたよりも大変なのよ…！…！」

「お前の放任のし方と世間一般の放任のし方どじや丸つきつ違つだ
る…！お前には子供への愛情がないのか？…あ…？…！優梨花に冷めた
飯を喰わせるのが放任つて言つのか？…！…わうわうのを育児放棄
つつんだよ…！」

夫婦喧嘩？？

初めて見た。

俺の親と変わらない位の年齢だと思ひ。
まさか毎日こんな事やつてんのか？

それを知つてて「ただいま」と声を掛けなかつたのか??

関係無いけど父親の方すげー元ヤンみてえな顔してゐるなあ。
つかここら辺元ヤンの親が多いのかな（汗）

取り敢えず出た方が良いな。

見つかつたら不法侵入だと思われるだろ。

俺は靴を履いて玄関を出た。

玄関を出た時、ポケットでケータイがバイブで震えてるのに気付いた。

メールかと思つたら電話で、

相手は祥弥だつた。

『もしもし??祥弥だけどわあ、どうよ木城優梨花ちゃん』

「どうつて普通じゃね??今送つて來た帰りだけど特に。」

『送つてやつたんだ。何??
一日惚れとか無いの??』

「ねえよ。可愛いとは思つけど同じクラスで隣の席なのに気付かない位だし。」

『それは俺らがクラスに興味が無いからだよ。（笑）

「それも有るけど。」

『とか言つてその内あの子の事好きになると毎つねー??璃來が。』

『

「あそ　　。それはお疲れ。」

『意味分かんねえからッ！－！（笑）

つたく俺が休憩時間に電話してやつてんのこよー。』

そんなの俺の知つたこっちゃねえよ。
バイトの休憩時間に電話して来る位ならその休憩時間の分まで働け
馬鹿野郎が。

……とは言わず、

「知るかボケ。」

と適当に流して終わつた。

この時点で好きになる要素は
顔だけだった。
だからと言つて好きではなかつた。
てゆうか好きになれないと思つた。
俺らの喧嘩を見られた張本人でもあるし、そもそも俺現時点で女に
困つてないし。

『まあでもあの子の事好きつー男は居るよなあ。確実に。』

まあ～。

それは顔とあの性格からしたら…

「居るんじゃねえの？？」

『…お前いつから女に興味無くなつた？』

「あ、？？あ 初めからじやね？？」

男にも興味ねえけどな。』

『あつたら困んだけど…（笑）

知つてるつ。

まあでも……

「お前の事は親友として頼れる唯一のダチだと思つてるからや。」

『あーらあらあらー！嬉しい事言つてくれるじやん（照）

「俺ら結構知り合いダチとか居るけど最終的には祥弥だし（笑）

ちょっと良くなっただよ。

まあでもこれが本音って事で。
心地良く受け取ってくれ（笑）

『俺もだわ。多分生涯のダチとしてたよにしているよ。』

段々恥ずかしくなってきた。

「さんきゅ。……祥弥バイトは??」

『あーあと5分だわ。急にT E して悪かったな。』

「全然。バイト頑張れよ。じゃあな。」

『おつづー。』

ブーッブーッブーッ…

電話が終わつた時俺は玄関に入つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4432m/>

ありがとう

2010年10月10日02時29分発行